志賀直哉全集未収録資料紹介

生井知子

岩波書店から発行された新しい志賀直哉全集は、断簡零墨に至るまで広く収められた全集であるが、まだ収録されていないアンケート回答・談話・座談会等が若干存在する事が判明したので、ここに紹介する。但し、新聞記事の末尾に独立して載せられた志賀の発言は、特に署名がない場合も談話として扱った。なお、無題の談話については、仮に記事の見出しを題として【】を付し、私が推定した事項には〔〕を付しておいた。また、座談会等は紙数の都合で一覧のみにとどめた。なお、本文には一切手を加えなかった。

《アンケート回答等》

☆大正十四年三月二日　「東京日日新聞」

「讀后　諸家の推薦した良書」

志賀直哉の他、川路柳虹、斎藤茂吉、小宮豊隆、上司小剣、里見弴の文章も掲載されている。とくに断り書きはないが、他の作家の文章から考えて、近頃読んだ本の中で、良書を推薦してほしいというアンケートへの回答であると思われる。大正十五年一、二月の志賀日記、昭和八年九月二十一

日執筆の『女の學校・ロベエル』を讀む」、昭和九年執筆の『「ジイド全集」推薦』、昭和十年執筆の『山内義雄譯「ジイド贋金つくり」推薦』等において、志賀はジイド作品に対する深い感銘を表明しているが、志賀のジイドに対する関心は、すでに大正十四年はじめにあった事が分かる。なお、この時点でのジイドの翻訳には、山内義雄訳『狭き門』(大12)、新しき村出版部から「人類の本10」として出た竹友藻風訳『窄き門』(大13)、石川淳訳『背徳者』(大13)、井上勇訳『田園交響楽』(大14・1)がある。おそらく志賀は『狭き門』(『窄き門』)と『背徳者』を読んだのだろう。

＊　＊　＊

志賀直哉

アンドレ・ジッドの諸作(但し和譯本を讀んで)

☆昭和三十一年春　「きょうと」Ⅲ

〈1・あなたのお好きな京言葉　2・京都でお好きな場所　3・京都へのいろいろな御注文〉という質問への回答である。志賀直哉の他、棟方志功、古川緑波、大下宇陀児、河盛好蔵、獅子文六、高浜虚子、星野立子、田村泰次郎ら著名人の回答が載せられている。

＊　＊　＊

1・好きな京葉言をこれといってあげることは出来ませんが概して女の人の言葉は柔かく聴いて快く感じられます。

2・場所は市内よりも郊外にいい所がありそうに思われますがこれも一つをあげて言うことはできません。

3・注文は新京極の店がまるでマーケットの店のようになってゐるのを興ざめに思いました・新京極の店屋の質をもう少しよくしたいと思います。

志賀直哉

☆昭和三十二年十一月　「あまカラ」

「厨房手実・・・」

二月号における説明によれば、〈手実〉とは正倉院文書のメモの意で、「厨房手実・・・」とは、キッチンでのメモを公開して頂く欄であるという。著名人の料理関係のメモが

連載されており、十一月号には、志賀直哉の他、梅崎春生のメモが掲載されている。

＊　＊　＊

志賀直哉

杉本健吉君は名古屋の生れで、三度の食事の二度は麺類でも平気だといふ人です。私は杉本君に頼んでキシメンを送つて貰ひ、近頃はそれをよく食つてゐますが、キシメンはウドンより腰が強く、スパゲッティの料理法で食ります。杉本君は麺類の通人で、製造元に注意をしてくれるので、特に気をつけた品を送つて貰つてゐるやうです。ついでにその店の名を書けば、名古屋蒲焼町四ノ五荒川。

（作家）

《談話》

☆昭和十五年八月二十四日　「讀賣新聞」

【人間後藤隆之助を語る】

昭和十五年八月に民間からただ一人新体制準備委員会常任幹事に選ばれた後藤隆之助について語ったものである。後藤隆之助は明治二十一年生まれ。一高時代に禅の修行を志し、建長寺に参禅中、志賀直方に見いだされ、直方が依頼されていた篤志家の奨学資金をうけて学生生活を送った。京都帝大在学中、直方の推薦で近衛文麿と知り合い、その後、青年団運動や農村問題研究にたずさわり、昭和八年には国策研究機関として昭和研究会を設立、近衛のブレーンとして世に知られつつあった。後藤と直方と近衛の関わりについては、池内柳雄『「菰野」の周辺』（『志賀直哉の領域』所収）にも記述がある。《五年ぐらゐまへ突然廿年ぶりで奈良の家へ訪ねてきた》という発言は、昭和九年十月四日の志賀日記に《夜後藤隆之助來る、色々農村の話陸軍の話を聞く、面白し、後藤母の所へ行く、》とあるのに対応する。なお、昭和二十六年十月二十四日、二十七年二月七日等の志賀日記にも後藤の事が出て来る。

＊　＊　＊

「これは悪口ではないが後藤といふ人は牛のやうな男だ、こつ〳〵と一つことをあくまでやり通す點では牛以上でもあらう、四年前に死んだ叔父の直方とは鎌倉の建長寺で参禅中に知りあつたといふことだが、叔父も有名な變りものでそのときは廿年計畫ではじめた禅の研究がやつと成らうとしてゐたときだつた後藤さんはそのとき

一高の 學生だつたといふから叔父も若いに似合はぬ變り種だと思つて好きになつたのだらう、軍人だつた叔父（荒木大將と士官學校同期、大尉で退官）は反面非常に几帳面なところもあつて、隨分びし〳〵行儀などについてもやられたらしいがそんなことで參るやうな彼ぢやない、悠々奬學資金で學校を卒業して自分の信念通りにやつてきたのだ、これが彼の根强い圖太さと力になつたのだ、高等學校でもよくあんな變り種がきたもんだといはれたほどあの顏通りの奇人だつたらしいがいはゆる秀才型とはおよそ線の遠いとは學生隨一の多額納稅者だつたことでもわかる、一時廐布三河臺の父（志賀直溫氏）の家から通學してゐたこともあつたが、いたつて

行儀は 惡いし、客の前でも平氣で思つたことをやつて家人をひや〳〵させてゐた、そのとき以來絶えて會はなかつたが、五年ぐらゐまへ突然廿年ぶりで奈良の家へ訪ねてきた、宿屋で急に病氣になつたとかで醫者をよばせたところやつてきたのが小兒科の醫者で、あのぬーツとした面魂の病人にすつかり驚いてかへつたとかいつてゐた、だが會はなかつたその廿年間に彼は彼の持味をそのまゝ實によく育てゝゐたことがまづ感じられた

當時は 壯年團を組織する計畫で全國を歩いてゐた途中だつたさうで農村の話をしてゐたが、よくもこつ〳〵とこゝまでえらくなつたものだと感心した確かに人間も練れてきたしなにか人をひきつけるといふか、支配するといつた力があふれてゐた、肥料の話をしてゐたが豆粕をまづ鳥にくれてその糞をもう一度豚にやる、その豚の糞が結構立派な肥料になるんだといふ話をしてゐたが、その他のことにしてもみんな自分が目でみた話で、なにかしつかり地に足のついた話ばかりで頼もしく思つた、ついこの間もちよつと立話をしたがその五年前にくらべてまた一段と丸味をもつてきた感じだつた、およそ下情には通じてゐるし、やり出したことはどんな障害でも乘り越えて行くあの性格の人間後藤を通して新體制に活躍する彼を思ふとき十分信頼してよい氣持がする」

☆昭和二十七年五月三十日　「毎日新聞」

【家族とお別れの宴】【昭和二十七年五月二十九日（談）】

毎日新聞社文化使節としての訪欧を前にした五月二十九日

に、世田谷新町の志賀直吉の家で、家族水入らずのお別れの宴を開いた時の発言である。三月一日号の「毎日グラフ」にも『「文化使節」の旅仕度』という題の志賀へのインタビュー記事がある。そこでは、「文化使節」について〈こういうハデな名のついた旅をするのは、もうおっくうな年になった。先日武者から手紙がきて、旅をすることについて、いろいろ注意してくれた。武者がヨーロッパへいったときは、スケジュールが無理だったので非常に疲れたそうだ。だから出かけるんなら無理な旅をしないよう、楽にしているよう、とわざわざいってよこした。親切な注意だ、と思ってさっそく返事を書いておいたが、武者がヨーロッパへ出かけたのは、もう古いことだし、今のぼくよりはるかに若いころだから、それで疲れたとすればぼくなぞよっぽどわがままな旅をしなければなるまいと思っている。気楽に、ノンビリと・・・同行するのが柳宗悦や浜田庄司君で、いい道づれだから、楽しい旅にはなるだろう。〉、「見たいもの」について〈フランスやイタリーでいい美術品を見るのを、一番楽しみにしている。イタリーの古い壁画の大きいものなどは、日本にいては写真で、わずかに想像するしかないんだからね。絵を見るといっても見たいのは、ぼくらと同じ時代までの作品で、あとから出てきた人の作品は、もう見なくてもいいと思っている。〉〈絵は、いろいろ見たいと思っているが、作家に会ってどうするということになると、もうおっくうだね。〉という志賀の発言が紹介されている。なお、後述するが、五月十日の「毎日新聞」にも、訪欧を前にしての座談会記事がある。

＊　＊　＊

『イタリヤを振り出しにスペイン、オランダ、スイス、フランス、イギリスを歩いて北欧へ行きたいと思っている。歩き回るのは二、三ヵ月にして、あとは居心地のよさそうなところを根城にして半年ぐらいゆっくり遊んで来るつもりだ』

☆昭和三十年五月二十五日　「朝日新聞」夕刊

【〝熱海も住みにくくてね〟】

常磐松に転居するに際しての談話。入院中の娘とは、当時、静岡県田方郡函南逓信病院に入院していた留女子を指す。森田正治の『ふだん着の作家たち』に〈志賀先生に関する記事を私は何回か書いた。最初は常磐松に移転したときで、

時のひとの横顔を描くといったような囲みものであった。私が気づかない固有名詞の誤植が一字あって、これはすぐ先生から指摘された。〉とあるので、この談話をとったのは、森田正治と考えられる。なお、誤植とは、記事中、常磐松が常盤松となっている事を指す。

＊　＊　＊

志賀さんの話　熱海は開けすぎて住みにくくなったよ。天気のよい日にはホコリをかぶるし、雨の日はドロをはねられてゆっくり歩けない。とにかく自動車の数が多すぎるように思うね。娘が近くに入院しているし時折は来るつもりだ。

☆昭和三十年六月七日　「河北新報」

〔故郷は懐しいネ〕〔昭和三十年六月六日（談）〕

昭和三十年六月六日の志賀康子宛の葉書に〈河北新報の記者が来たので青根の宿屋の話をした、七日の朝刊に出る筈で送る〉とあるのが、この談話である。談話中〈曽祖母〉とあるのは、六月五日の留女子宛の葉書から考えて祖父母の聞き間違いであろう。〈この前仙台にきたのはたしか戦争のはじまったころ〉というのは、留女子・寿々子・万亀子同伴の奥羽旅行の際、昭和十六年五月二十八日に、仙台に立ち寄った事を指す。

＊　＊　＊

僕は石巻生れなので、今から六十二年前に曽祖母に連れられて青根にいったことがある。その時泊まった丹野七兵衛さんの家のことを思い出してふらりときて見たわけだ。温泉というと箱根や熱海にばかり行っていたせいか、なにかさびしい感じをうけたが、昔の面影は残っていて懐しかったね。この前仙台にきたのはたしか戦争のはじまったころだから十四、五年前のことと思うが、その時は青葉城跡や霊屋などを回っただけなので強い印象は残っていない。

今度岩波から全集を出すことになり、古い日記をも含めることになったので、それに目を通そうと思って適当な場所を探しに来たのが目的の一つだ。ぼくはこんど七年間いた熱海を引払って東京へ引越したがこの家は谷口吉郎君の設計によるもので自分でいうのもおかしいが大変うまくできているとみんなほめてくれている。これから小説をかくとはっきりはいえないが、かく気がまったくないわけじゃないよ。

文壇の最近の傾向については若い人のものをほとんど読んでい

ないからわからない。第三の新人などという言葉も知らないね。若い人で知っているのは阿川弘之君ぐらいのものだ。彼はぼくのことについてはぼくよりもよく知っているんだからね。自分のことを人に知られることはあまり良い気持じゃないが、このごろは年のせいか裸にされまいとする気はそれほどなくなった。広津君が仙台に来るというので出てきたが、これから後どうしようという計画は立てていない。

☆昭和三十二年二月十五日　「朝日新聞」夕刊

【「流れる」に感心】

新橋演舞場の新派公演『流れる』を見て、原作者・幸田文を前にして語った感想。映画の『流れる』を見ての感想は、武原はんとの対談『「流れる」を見て語る』にある。

＊　＊　＊

「小説として大変すぐれたものだが、これを芝居にするのはムリだと思い、実は心配しながら観ていたが、ちゃんと結末もついているし、映画にくらべると人物の描き方にもそれぞれ重みをかけ、時勢にあわせて書かれているので面白かった。ちょっと冒険的な仕事だが、ある程度成功したといえるでしょう。それに女中の梨花という役、映画の田中絹代もよくやってはいたが、やはり水谷にくらべるとただの女中にしかみえませんね。さすがに水谷は小説のニュアンスに近づいた性格を出していて感心しました」

☆昭和三十三年二月　「藝術新潮」

「新しい歌舞伎」（聞き書・千谷道雄）

昭和三十三年一月三日の菊池重三郎宛の葉書に〈此間芝居の千谷君との対談を「藝術新潮」でとるといふので自家でやるとき美人の速記者來て〉云々という文章がある。

＊　＊　＊

新しい歌舞伎

志賀直哉

〈聞き書・千谷道雄〉

もとは僕は見て來た芝居の番附でも何でも、皆ちやんととつておいたものだ。例えば義太夫の毎晩の番附なども揃えてとつておいたし、それからこれは今惜しいことをしたといわれるけ

れども、その頃パリーへ行つた人が、オペラのリプレットというパンフレットを澤山くれた。これは直接僕には何の役にも立たないが、とに角とつておいていゝものだと思つて、藏つてあつたが、何時の間にか失くしてしまつた。東京を離れて、彼方此方歩いていたから、その留守の間に何處かへ失くしてしまつたのかも知れない。

僕は尾道だとか、松江だとかへ行つている頃祖母さんがまだ達者だつたので、此方の消息を知りたいだろうと思つて、細々と便りをしていた。その手紙が殘つていると、その頃の日記になると思うのだが、そんなのも何時の間にか何處かへ行つちまつた。うちの者は別に後で役に立つと思やしない。祖母さんに讀んでやればそれで良いと思つていたんだろうが、これなど一寸惜しい氣がする。もう探しても何處にもない。

そうかと思うと、僕の實母が僕が生れた頃親父に宛てて書いた手紙が、知らぬ間に奈良の僕の家の書齋の戸棚から出て來た。これなぞ義理の母がとつて置いてくれたのだ。祖母さんが髪を結つて貰う時、油の手を拭く爲に出して來てあつたのを、義理の母が見つけて、藏つて置いてくれた。そうかといつて、この義理の母とは實母の話なんぞしたことは一遍もない。それで義母はじかに僕に渡し憎かつたのか、何氣なく僕の書齋の棚の上に置いておいてくれた。それを此方は義母が亡くなつてからもまだ氣がつかないで、東京へ引越してから、大工の倅が見つけ出して、とつて置いてくれたのだ。（この消息については先生の戰後の短篇「實母の手紙」がある。）

「續々歌舞伎年代記」という本が出た時、田村滔二郎に贈られて、終いの方の自分の見た芝居に○印をつけておいたが、あの時分にはそれも一遍じやないので、一つ芝居を何遍も見ている。歌舞伎座に銀二郎という出方がいて、幾日に行くからといつて、樹をとつて貰いに行くと「一寸見ていらつしやい」といつて上げてくれて、平土間の後の方で一幕か二幕見て來る。だから五代目の「辨天小僧」なんか三度か、四度見た。僕は五度見るつもりでいたんだが…。歌舞伎座、明治座、それから東京座がその頃割によかつた。あれは何でも大阪から延二郎時代の延若が出て來てあそこに立籠つた。それが非常に當つた。それからあの劇場に少しい、役者が加わる樣になつたという話だつた。

（東京座明治三十年初開場、同三十三年延二郎東上。）

續々歌舞伎年代記は確か團十郎の死ぬ頃までだから、明治三十六年頃でお終いになつているのだが、あの後の方が無論もつと澤山見ている譯だ。あの後が出たら面白いと思う。そうすれば又色々思い出すだろう。誰かこういうことの好きな人がいる

のだから、材料を集めていそうなものだが。

――先代左團次の自由劇場（明治四十二年有樂座以降）について。

自由劇場も初めは見た。築地は見たことがなかつた。自由劇場もどうもあんまりこなれてないのでね。よく惡口いう人は、とうもろこしの毛を頭にくつつけているみたいだといつたが、如何にも見た目からひどいものだつた。こういうものだと思つて、我慢して見ていたが、しまいに我慢し切れなくなつた。それで築地は全然見ないで…長年見ないでいて、奈良の時代（大正十四年より昭和十三年まで）隣にいた中村義夫君という人に誘われて、大阪の四ツ橋の文樂座で、友田（恭助）だの、東屋（三郎）だの、田村秋子、杉村春子、あんな連中がやるのを見たら、馬鹿にうまいんだよ。すつかりこなれてる。大いに感心した。

自由劇場はそんな風だつたが、その頃ごくチャチなものではあつたけれども、バンドマンの一座なんて外人のオペラ團が毎年定期的に來てやつていたもんだ。横濱へ來て、それから東京へ來た。「メリー・ウィドウ」なんかやつていた。ありやまあ毛唐の旅廻りだろうがね。（バンドマン一座は明治四十年八月來朝橫濱山手公會堂、東京では前の有樂座で公演している。）

もつと古くは、オランダ人でへんな芝居が歌舞伎座にかゝつたことがある。それはオランダ人の役者はオランダ語でしやべり、あとは英語だつたか何だか、違う言葉でやつている。スケッチ・ブックの中の「リップ・ヴァン・ウィンクル」という話、日本の浦島みたいなのをやつてるんだ。（明治三十四年二月、歌舞伎座チャアレエ・テエラア一座。）そうかと思うと、演伎座なんかに毛唐の芝居が來て、今考えればおかしな話だが、馬に乘つて駈けつける所なぞ、鞭だけ持つて舞臺をピョン〳〵はねて廻るんだ。エキゾチックな所が面白かつた。

團十郎と一緒に芝居したとかいうのもあつた。これは見た譯ではないから、何時來たのか知らんが、とに角團十郎とも交渉があるんだよ。（明治二十七年七月、露國帝室附の佛國女優テーオー嬢が團十郎と一座した日歐合同興行の記錄がある。演目、「出世景清」「博士違い」「互いの疑惑」）

――小山内薫のこと。

小山内君は僕より二つ年上だ。

これは本人から聞いた話だが、大學へ入つた時、卒業論文のテーマを「英詩に現われたる死」という事に決めて、在學中の三年間に漫然と讀んだものでも何でも、英詩に死を歌つた所で出て來ると、全部アンダーラインして置いて、それで論文を編めたということだつた。僕はそれを聞いて、實に要領のいいものだと感心した。それを見る教師の方から見ると、隨分よく勉

強したものだと思うだろうし、小山内君の方からいえば、それは大した努力ではないからね。

又ある時、僕にイギリスのピネロ（A. W. Pinero 1855—1934）を讀み給えと薦めるんだ。それで僕が丸善に誂えて、ハイネマンという本屋で出ているピネロを全部十冊程を取寄せた。屆くと、二、三冊殘してあとを小山内君が貸してくれといつて、持つて行つてしまつた。後で考えると、小山内君は讀みたかつたが買う金がなかつたので、僕に薦めて買わせたらしい。終いに催促して返して貰つた。ピネロという人のものはファースが多く、僕はその時初めてファースという言葉を知つた。

ハウプトマンの「寂しき人々」が向うで初演された時、産科の醫者が大きな赤ん坊を引張り出す鉗子という機械を持つて、舞臺に現われる所があつて、それが當時の人目を驚かし、物議をかもしたそうだが、小山内君はそれを何かで讀んで知つていて、眞砂座で藤村の「破戒」の演出をやつた時丑松の父親を殺した大きな種牛を引張り出して殺す所で、殺す前に何人か掛つて牛の體溫を計る。それが例の縫いぐるみの牛が、舞臺の眞ん中で見物の方に尻を向けて、ノソッとつ、立つている所で、尻尾を持上げて、大きな體溫計を差込むのだ。

ところが、それをやられると、牛があばれて首を振る。その時どうしたはずみか、牛の片方の角が外れて、舞臺にカラン〳〵というような音をたてて轉がつたのは、おかしかつた。折角、寫實で批評家に惡口でも言われたいと思つたらしかつたが、駄目になつてしまつた。（島崎藤村の「破戒」は明治三十九年三月刊行、同年七月眞砂座で上演された。小山内薫は三木竹二の紹介で伊井に會い、眞砂座の座附作者になつたごく初期のことである。當時小山内は藤村に私淑していた。）

——七世團藏について。

此間何かの座談會で遠藤爲春氏が、團藏（七世）は名優というが、それ程じやないと頻りに言つていたが、あれは少し團藏に氣の毒だと思つた。云う方はあ、いう通人で、聞いている方は、良いも惡いも自分では見てない人だからね。要するに遠藤氏は團藏が嫌いなんだよ。團菊左という役者の方に親しみを持つていて、それが亡くなつて團藏が乘込んで來たんで、幾らか反撥を感じた人だろうと思う。

ところが、犬養健君など前の仁左衛門（十一世）をよく知つていて、時々行つたりしていた時代があつて、その時聞いた話だが、仁左衛門がいうのに、役者というものは嫌われたら、いくらうまくやつていてもしようがない。相撲取りはいくら嫌われても、強ければ土俵の上で勝つから、それで良いが、役者の

方は、あの役者は嫌いだとなつたら、いくらうまくてもどうにもならない。…というのは、實はあの仁左衛門は鴈治郎なんかに比べれば、餘り好かれない方だつたから、これはつまり自分のことをいつてるんだ。あの頃、相撲じや太刀山が強かつたが、あんまり好かれなかつた。だが好かれなくても、相撲は勝負がついちまうからいゝが、役者はその點實に困るというのだ。

團藏だつて、遠藤氏なんかは嫌いなんだね。團十郎、菊五郎が好きなのは差支えないが、あの批評は少し氣の毒だと思つた。一方では又團藏好きというと、菊五郎、團十郎以上の樣にいう人がある。吉右衛門なんぞ少しそうじやなかつたかな。

左團次（四世）という人が、これは又派手でよかつた。「太閤記十段目」の光秀とか、「矢口の渡し」の頓兵衛等なかなかいゝ。十段目等團藏と比べれば、ずつと立派だ。その代り「馬盥」はしやちほこ立ちしても團藏に適わないから、やらなかつたようだ。團藏を初めて見た時が、その「馬盥」だつた。京都へ旅で行つて、丁度光秀の何百年祭とかいつていたね。京都ではお寺を守つてくれたということで、信長より光秀を大事にするのだ。（明治三十四年頃京都歌舞伎座ではないかと思われる。とすると、歿後三百二十年の忌日に當る。）

とに角「馬盥」で一人舞臺になつて、じつとしている。三味線をたゞポツン、ポツンと入れて、あの間が隨分長い時間だと思つていたが、後になつて吉之丞に聞いたら、計つて見ると、そんなに長い時間じやないそうだね。それでもその間見物が皆引込まれてしいんとして見ているのだ。

團藏の仁木彈正が花道でそつくり返つたと遠藤氏なんか惡口をいつているが、あれも一種獨特の變な強い感じがあつた。忍術をつかう魔物みたいな、妙な感じが…。それを里見や木下と一緒に見て、（明治四十一年三月歌舞伎座）十時何分かの夜汽車で京都へ行つた。その時に大阪で丁度鴈治郎がやつぱり仁木をやつていたので、見に行つた。間幾日置いたかしらないが、とに角東京で見て、その足で家に歸らず夜行で行つて、向うで又見た譯だ。（同年四月中座）ところが、どうも腹が立つ位だつた。團藏がぐつと反つて、…何でもその時の話では、それまで目をつむつてガッと開くと、非常に大きく見えるとかいう苦心談が出ていたが、…そうして反つたままぐつと唯押して行く樣に、身體を搖らず引込んで行く。鴈治郎ときたら、ステッキ持つて散歩しながら引込んで行く樣な感じだつた。

もう一つ感心したのは、能で左陣という人の「是海」を見た時。これがやはり身體がキチッとしていて、團藏のそういう時の芝居を思い出した。實に固い感じだつた。左陣は櫻間伴馬と

いつた人だ。（樫間作馬は實生九郎、梅若實と共に明治三名人と稱され、七十七歳で左陣を襲名、大正六年八十三歳で歿した。此間亡くなつた弓川の父君。）

それから片山はる女の「蟲の音」というのが、實によかつた。米澤の祝いか何かで見た時、俳諧師の樣な帽子をかぶつて、唯杖をついて出て來て、秋の野原で蟲の音を聞いているだけ、それが實によかつた。舞みたいなことは何にもしない。左陣や圓藏と同じカチッとした味だつた。その後、百歳近くなつて同じものをもう一度やるというので、家内にさんざん講釋を云つて連れて行つたが、もうその時は年をとつて衰えたのか、却つて相當派手に動いて舞つていた。（片山はる女、三世井上八千代、昭和十二年歿、行年百一歳。）

それから神田松鯉という講談師が、これは後に次郎長傳をやつた前の伯山の師匠だが、この人の講釋の中で、强い侍が一人で籠を擔いで箱根の山越えをする所なんか、右から左へ肩を代える動作でも、實にキチッとしていたね。（神田松鯉、二代目神田伯山、後に名をゆずつて、神田祭をしやれて神田松鯉といつた。大正九年七十九歳歿。）

そういう年とつた人の、よろけるところの全くない藝…これらは感心して既に何十年か經つているが、未だに忘れない。

――最近上演された先生の作品「荒組」（昨年十一月歌舞伎座）「赤西蠣太」（同一月演舞場）等について。

「荒組」はまだ充分こなれていなかつた。唯初めからうまく行くのと、行かないのとあつて、あれなんか何遍か練つて、段々ものになるだろうと思う。舞踊家の黛節子が今年の六月七日とかに產經ホールで踊りにするのだそうだ。黛節子は歌右衛門があれをやるのが、本當は不滿だつたらしい。僕がほかにはやらせないといつたのを、此の家で落合つてうまく讓つて貰つたのだが、…ところが今では喜んでいる。一度やつたのを見たお蔭で、色んなことが判つたというのだ。自分もあれでやろうと思つていたが、あれではうまくいかん所があると思つたらしい。それで今度は、三人だけにするんだそうだ。荒組と女神と阿陀仁と…隱者も岩頭も出さないといつていた。…まあ、そういう風に色々やつて貰うのも面白いだろう。それで盡きるという譯じやない。新作を古典として殘す樣に、つまり前と同じものを繰返すのじやなく、少しずつ工夫を重ねて、うまくやり直して何度も上演するという風にしたら、芝居のレパートリーも殖えるだろうと思う。

「赤西蠣太」の方は、圓地さんが自由に脚色してくれて、僕はかえつてよかつたと思つている。その時に言つたことだが、あ

の作のモティーフになる色男の銀鮫鱒二郎が、簡單に考えて、赤西は女に振られると決めちまう。赤西自身もそう思つている。ところが小江という女が若侍等見ていて、どうも滿足しない。やつぱりあの人に誠實なものがあると見拔いて、蝸太の戀文に應じ、そこで色んなことが間違つて來て、一種の喜劇になるのだが、そういうところをしつかり摑んで貰えばいゝと僕は言つた。それをうまくやつてくれたからね。映画の「赤西蝸太」では、千恵藏が男前の所も見せるというので、二役で原田甲斐をやつたが、松綠はそんなことはしなかつた。

映画の時は、按摩の安甲を上山草人がやつていて、杖をついてこう前屈みになつて出て來るんだが、芝居だと逆に杖を前にして後へ反つて歩くだろう。その型がいやであ、したのかも知れないが、あれじや危くつてしようがない。盲だから頭をぶつけちまう。それを伊丹萬作に言つたら、草人位になると、監督でもかれこれ言えないんだそうだ。

千恵藏の「赤西」の時（昭和十一年六月千恵藏プロ）には、僕のものが映画になつた最初だつたから、此方も自分のものだという考えで見に行つた。家の者大勢連れて行つて京都の朝日會館のアラスカで大變な御馳走になつて、試寫を見たんだが、後で千恵藏と伊丹君に「どうでした」と聞かれた時、自分のものだと思つているから、返事が出來なくなつてしまつた。それで「別に不愉快なことはなかつた」と言つた。張切つてやつてくれた人にこういう挨拶はない筈なんだが、此方は大變結構でしたともいえず、氣の毒したと思つている。

其の後、今度は千日前の映画館でやつているのを行つて見たが、この時にはもう自分のものという頭でなしに、客觀的に伊丹萬作の作品として見た。そしたら面白かつた。

最近は、見物が皆樂しんでいるかどうかという樣なことに一番關心を持つて見る。原作をどうのこうのやかましくいうのは、野暮な話だし、原作通りに忠實にやることは出來ない話だし、此方が芝居で書いたものならとも角、自分は自分で原作があるのだから、やつぱり見る人が喜んでくれるものにして貰いたいと思つている。

――古典の再生について。

新作劇というのも結構だが、近松やなんかの古典で色々改惡されているものを、もつとよくすることも研究して欲しいと思う。近松の書いた通りにすれば良いのだが、それではうまく行かないというので、書直す、その直し方が隨分ひどいものがある。

例えば、僕はよく言うが、「時雨火燵」の紙治で、おさんが

小春に手紙をやつて頼むので、小春は自分が犠牲になつて治兵衛のことを思い切る。すると愛想ずかしを言われた治兵衛におさんがその事を聞いて、小春は自殺する氣でそういつたに違いないと思つて、自分がそれを頼んだ癖に、慌てゝ小春の身請を頼む。其處へ小春が心中する氣で出て來る。あれじや何にもならない。せつかく犠牲になるといつた事がうそになるわけだ。門左衛門はそうは書いていない。半二が安直に書直して一緒に道行に出掛けちまう。あゝいうことは非常な缺點なのだがもう約束みたいになつて、皆平氣で見ている。あゝいう所を、もう少し上手に、喜ばしながらも少し考える人にも腑に落ちるように整理して行つたらいゝと思う。

「阿波の鳴門」の十郎兵衛が娘を殺すのだつてそうだ。おつるが何とかいうのを言葉を言わすまいとして、口に手をやつて、あやまつて殺すという風にしてやつているが、本當に殺して金を取つたことにしたら、もつと深刻になるだろうと思う。十郎兵衛という男だつて、相當惡いことをしている奴だ。子供が金を持つていると見たら、殺す位やりかねない奴なんだ。それが後で自分の娘を殺したことに氣がついて、苦しむという樣にすれば、後の苦しみがもつと強く生きる。「胸に燒きがねさざる想い」なんていう文句もあるのだから…。「合邦」だつて今風にやるのなら、若い女が年寄の細君になつて、息子を誘惑するという風に、…丸本には前にそういう場面があるんだから、そういう解釋でやり直したら、ぐつと面白くなる。

だから、僕は、古いものにそういう餘地が相當にあると思つている。色んな間の抜けた所を直して、新しい息を吹込むことが出來ると思うのだ。

前の勘彌が「女殺油地獄」を有樂座でやつた時、（大正八年三月文藝座第三回公演）丸本通りにしてやつていたが、これは實に惡い奴で、何だか凄味があつた。

この頃のなまじつかな若い人が、道德に反した樣な變なことを言つたりしたりしているがそれより古いものであるのだから、そのゆがみを直して上演したらいゝものがまだ相當あるだろうと思う。

實際どういうのか、人間つてものは不良だとか、惡い奴が好きな樣なところがある。毎日の新聞を見ても、赤線區域で與太者が何人捕つたとか、不良狩りがあつたとか、何もあんなことをあんなに出すことはないと思う。新聞に出ているからつい讀むのだが、讀んだつて何になるのかという氣がする。映画でも大概與太者が出て來たり、やくざが現れたり…ところが日常の僕等の生活はあんなものとは何も結び附きがないのだ。芝居も

そうだ。權八なんていうのも大不良だな。

此の間見た「權士」という芝居。（昨年十二月歌舞伎座）あれは夢だけれども、石堂右馬之助みたいな慈悲深い役人が頻りに權八に同情していると、片つ方は敵役で頻りにそんなことをしちやいけないといつてるのに、それを赦して、忽ち小紫に繩目を切られてうまくやられてしまう。同情して何か言つてる役が目茶苦茶だ。それならそれで、そういう皮肉かというと、別に皮肉でも何でもない。

權八が不良だろう。切られ與三がそうだろう。三人吉三も辨天小僧も皆しようがない奴等だよ。切られ與三と蝙蝠安みたいな奴にやつて來られたら適わんよ。羽左衛門と松助が來るのならい、が…。

實際自分の子供がそうなつたら、大變なのだが、見物はそれを見てる分には好きなんだから妙だ。そうかといつて教訓になるような話を芝居でやつても面白くないかも知れないがね。

☆昭和四十年七月三十日　「東京新聞」夕刊

【谷崎さんをいたむ】〔昭和四十年七月三十日（談）〕

谷崎潤一郎の死去に際しての談話。他に武者小路実篤、里見弴らの談話も掲載されている。

＊　＊　＊

志賀直哉氏の話　あらたまっての話は、もうかんべんしてほしい。谷崎の死んだのは、けさ八時半ごろ知らされたが、年寄りだからね、仕方ない。谷崎と私と、どっちが早くなるか、といったぐあいだったし、谷崎も要心していたらしいが、最近、からだのぐあいがよくて、少し出歩きすぎたようだ。しばらく会っていないので、この間も、もう少しからだの調子がよくなったら会おうか、と電話で話したばかりだ。

☆昭和四十一年一月十日　「朝日新聞」夕刊

【志賀直哉氏の母の生家分る】

郷土史家杉本幸次郎の調査によって伊勢亀山江ケ室の佐本源吾の旧宅が発見された時の談話である。

＊　＊　＊

志賀直哉氏の話　なくなった母の生家が見つかったことは個人的にはありがたいことだ。母の父が亀山藩士で江戸詰めだっ

たこともあり、東京ではないかとも思っていた。亀山で見つかったことは意外だ。私自身が見に行こうとは思わないが、私の子どもたちが興味があれば行ってもらってもよいと思っている。

〈座談会〉

☆昭和八年二月　「婦人之友」

「客間開放の會　早春藝術と旅行の話」

主人　志賀直哉・康子

客　小川晴陽・若山爲三・小見寺八山・濱田葆光・中村義夫・加納和弘・池田小菊・三上秀吉

於奈良〔上高畑〕志賀宅　昭和八年一月二日

〈小見出し〉　關東・關西・住みごこち　旅・ところ〴〵　古美術・その鑑賞・ゴシップ

昭和八年一月二日の志賀日記に〈婦人の友談話會に三上京都より來る、若山　濱田　小川　小見寺　加納　中村　池田等、夜まで呑氣に話す、〉、五日には〈三上談話記事を持つて來る　直す〉とある。

☆昭和十五年新年特別号　「スタア」

「映畫を語る」

志賀直哉・里見弴・南部圭之助・津村秀夫

〔於箱根湯本福住　昭和十四年十一月十八日〕

昭和十四年十一月十七日の志賀康子宛の葉書に〈里見　津村さん等との對談會は福住でする事にした、〉同日の福住からの康子宛の葉書には〈明日皆此所に來て一泊座談會の筈。〉とあり、十八日の若山爲三宛の葉書には〈今晩里見と、映畫雜誌「スター」といふのの人が來て、里見と二人で對談會を開く筈、年中會つてゐる人間の對談會で、どんな事になりますか。〉とある。

☆昭和二十五年十一月一日　「朝日新聞」夕刊（大阪版）

「私の友達」

志賀直哉・吉田安太郎

新聞記事によると、吉田安太郎は、当時三十六歳で熱海小川屋旅館の客引。東京上野の魚屋に生まれ、家を飛び出して船員や土工をやった末、伊豆半島を放浪し、下賀茂で炭焼の手伝いをしていたが、日給三十円に閉口して、古巣の湯河原へ舞戻ろうと決意。昭和二十五年三月上旬、熱海から伊豆山へと歩く途中、水を飲ませてもらいに大洞台の志賀家に立ち寄ったのがきっかけの付き合いだという。昭和二十六年二月二十一日、五月六・十一・十五日、六月五・九日、七月七・二十一・二十二日、十月十三日、十二月三十一日、昭和二十八年五月十一日、六月四日の志賀日記にも吉田安太郎の事が出て来る。

☆昭和二十六年十月　「世界」
「時世について―鈴木大拙氏をかこんで―」
鈴木大拙・志賀直哉・安倍能成・長與善郎
［於伊豆山岩波別荘　昭和二十六年七月十七日］

昭和二十六年七月十七日の志賀日記に〈自分は三時過ぎのバスで伊豆山岩波別荘に行く、鈴木大拙さん　安倍能成長與善郎等と「世界」誌座談會　鈴木さんの人間も話も氣持よし、〉とある。

☆昭和二十七年一月二日　午前7・30～8・00
NHKラジオ第一
「朝の訪問」
梅原龍三郎・志賀直哉
［於大仁ホテル　昭和二十六年十二月二十六日］

昭和二十六年十二月二十六日の志賀日記に〈大仁ホテルに梅原龍三郎を訪ね、正月二日放送する對談の錄音をする、〉とある。一月二日の日記欄外には、放送を聞いての感想として〈自然でよかつたやうに思つた〉とある。

☆昭和二十七年五月十日　「毎日新聞」
「日本文化の国際的交歓　本社文化使節の抱負」
志賀直哉・柳宗悦・浜田庄司・（司会）森毎日新聞社取締役
［於毎日新聞社　昭和二十七年五月七日］

昭和二十七年五月七日の志賀日記に〈二時に毎日新聞社に行き、森記者司會にて柳　濱田と三人にて座談會、〉とある。五月三十一日からの毎日新聞社文化使節としての訪欧を前にその抱負を語ったものである。

☆昭和二十七年五月十八日　午後2・30～3・00
ラジオ新日本
志賀直哉［・柳宗悦・浜田庄司・河井寛次郎］
［於赤坂　昭和二十七年四月二十二日］

当日の毎日新聞ラジオ欄には〈座談会＝志賀直哉ほか〉としか記されていないが、昭和二十七年四月二十二日の志賀日記には〈土橋たくみに行く　柳、濱田、河井等來てゐて、毎日の自動車で赤坂の方の料理屋に行き座談會の放送錄音をする　三十分間の座談會なり、直ぐカケて聽く、〉とある。

☆昭和三十年一月一日　午後11・00～11・40
ラジオ東京
『新春座談会』
志賀直哉・谷崎潤一郎・吉井勇・（司会）辰野隆
［於熱海伊豆山谷崎別荘　昭和二十九年十二月二十六日］

昭和二十九年十二月二十六日の大森直道宛の書簡には〈今日谷崎邸での對談中安倍能成君が歌右エ門が來るとポッと顔を紅くすると小宮君がいつてゐたといふ條はどうか除いて下さい　小宮君がいつたのは事實ですが、串戯にいつたのかも知れず兎に角院長のさういふ話學生が變な好奇心を持つ場合あつては困るので必ずその部分お取除きお願ひします〉とある。昭和三十年一月一日の朝日新聞ラジオ欄『見もの聴きもの』には〈志賀直哉、谷崎潤一郎、吉井勇の芸術院会員三氏が集まり、辰野隆氏の司会で和やかに新春を語る。新年にからまる幼いころの家庭や学校の思い出話から、後年有名になった人々との交友と、その秘録、東京と京阪の新春風景など。〉とある。

☆昭和三十九年十一月三日　午後9・45～10・15
フジテレビ
「近代日本文学の足跡」（近代文学館文庫の設立を記念し）
志賀直哉・里見弴・広津和郎・（司会）巌谷大四
［昭和三十九年十月二十八日］

昭和三十九年十月二十四日の上司海雲宛の葉書には、《此二十八日はフジテレビのロク音で出かける》、《フジテレビは十一月二日といひましたが十一月三日だといふ事です》とある。

※付記
この調査は、平成四年度文部省科学研究費補助金による研究成果である。